

欧州歴訪

次の目的地スイスに降り立った敏生は、ジュネーブにBIRPI（現WIPO）本部を訪ねる。「ROCはパリ条約に加盟できるかどうか？」敏生はそれを確認したかったのである。応対に出たBodenhansen 局長は、「ROCは国連のメンバー、しかも常任理事国の一つだから、問題はないはず。」と言う。

民間大使を自任する敏生には、大きな励みがあった。

スイスの地図を購入。一日三軒を目標に紹介を受けていたメーカーを訪問。当地四大化学薬品工場に単身乗り込む。「地球の向こう側に台湾という島があって、M.S.Linという弁護士が特許商標のサービスを提供している」。特許商標案件が最も多いのは薬品、化学工場。彼らに台湾を知ってもらうことが先決だった。

第三の目的地はドイツ。台湾特許処宋副処長から紹介を受けたドイツ特許局の友人が、ミュンヘンで接待してくれた。初めてドイツの豚足を食べた。ここで知り合ったドイツの弁理士シヨーン氏とは、会ってすぐに意気投合。このうち敏生がドイツを訪れる折には、わざわざ数日の休暇をとって付き合ってくれるほどの、二人は親友となる。

ミュンヘンでは浅村氏と会う約束をしていたが、うかつなことに氏の宿泊先を忘れてしまった。敏生はしかたなく、フロントに問い合わせてもらったことにしたが、彼らはあまり協力的でない。そこで敏生。これみよがしに五マルクコインをカウンターに転がすと、「Do your best!」。そう言い残して

コーヒーショップへ。コインのからからと回る音が鳴り響く。わずか十五分で、浅村氏の宿泊先は知れた。

「地獄の沙汰も金次第」。外国でそれを痛感する敏生であった。

ヨーロッパは北に向かうほど整然としてくると、敏生は思った。イタリア風のあのいい加減さは跡形もない。ただ英語についていえば、いい加減なイタリアで自信をつけるのが最適。帰ったらみんなに教えてやろうと、敏生は英語の先達になった気分だ。

言葉は自在になったが、懐は不如意になった。財布をさぐると、出国時に持ち出した千ドルが残りわずか。台湾銀行発行の五百ドル小切手を交換しなければ。敏生は六枚、合わせて三千ドル分持って来ていたのである。

ミュンヘンには親しみを感じていた。敏生の中国語読みはミンション。ごろ合わせのようだが、素晴らしい町に違いないと、来る前から想像していた。敏生はここで当地三大銀行の一つドイツ銀行に小切手の交換を頼む。ところが、である。

「台湾銀行のサインカードがないので交換できません。」と銀行員。

「冗談じゃない。台湾の『国家銀行』の発行した小切手が換えられないなんて。」と敏生。

銀行員は慇懃かつ冷淡に、敏生の主張を軽くないした。

意気消沈して銀行を後にした敏生は、財布の中味と相談。経費の大幅節減を覚悟した。こうしてフルフルトを起点に、敏生の貧乏旅行が始まる。食事は駅前のホットドッグで済ませたこともある。今とは違う。国際金融業務はまだまだ行き届いていなかった。ドイツで一、二の銀行でも台銀の小切手が使えないのだ。ドイツはだめだったがオランダで。敏生はあきらめない。ただ、台湾はあまり

に遠い。見捨てられたような気がして、つらかった。

ドイツでも化学メーカーの訪問は、いつもの敏生にもどって精力的にこなしたが、工場を出たとたんにお腹がグーグー鳴り出す、という悲惨な場面も経験している。

オランダに来てまずやるべきことは銀行さがし。インターナショナル・バンキングの支店は確か台湾にもある。「欧州の銀行がだめならアメリカの銀行で試してみよう！」とはいえ、このあとベルギーにもフランスにも行かなければならないのだ。「換えられなかったら？」なまなかの事ではひるまない敏生も、この時ばかりは胸がドキドキした。

銀行員は首を横に振った。「マネージャーに会わせてくれ。」敏生は必死である。

申し訳なさそうな表情で出てきたマネージャー氏の機先を制して敏生は、「貴行は台北に支店をもっている。面倒でも調べていただけないだろうか。私はこれから何ヶ国も回らなければならぬので。」と、窮状を切々と訴えた。

マネージャー氏は心を動かされたようだ。交換は「OK」。五百ドル小切手を一枚取り出したが、「待てよ、後々のことも考えて六枚全部交換しておいた方が」と思い直し、お願いすると、これも「OK」。虎の子の三千ドルを手にした敏生は、まずは腹ごしらえと、宿泊先のホテルで特級料理。ホットドッグばかりで惨めな思いをさせていた可愛そうな胃に、報いてやった。

急場しのぎに、業務上取り引きのある欧州の同業者や、知り合ったばかりの異国の友人たちから、融通してもらおうという考えもなくはなかったが、財務の信用にきずを付けたくなかったし、「国家銀行」が通用しないというのも恥ずかしい話なので、いよいよとなるまで我慢しよう決めていた。

懐が暖かくなって、業務訪問にも油がのってきた。

オランダ人は語学の天才ぞろい。国連の同時通訳はオランダ人が多いというのもうなずける。

オランダ特許局は厳格なことで有名だったが、のち欧州特許局ができて、その調査機関に組織替えされている。

アムステルダムでは自転車の多さに驚いた。

総じてオランダの文化には近しいものを感じた。日本の植民地となる前、台湾がかつてオランダ人に統治されていたことと、関係があるのだろう。

業務の方と言えば、いささか困難を感じていた。台湾の産業はこのころまだ農業主体。三大輸出品目はバナナ、樟脳と砂糖。こんな段階で特許市場を開拓しようというのだから、セールストークはどうしても必要。いやそれ以前に、TaiwanとThailandの違いを分からせることが、敏生の使命となった。

ベルギーはフランス語の国。英語はオランダ人ほどうまくない。相手がフランス語ではさすがの敏生にも歯がたたない。

ベルギーの特許は届出制。事前の審査がないから、特許業はあまり発達していない。ただ、特許関係の資料は世界各国のものがそろっている。膨大な数だ。

そしてパリ。敏生はついにこのロマンの都にやってきた。エッフェル塔、シャンゼリゼ通り、凱旋門を駆け足で。ルーブル博物館でモナリザの微笑も見ておきたかったが、フランスの二日間は盛りだくさん。メーカーの訪問先はここが一番多いのだ。

着いた日にパリ市の地図を購入。車がないので、地下鉄と足で歩き回った。一晩がかりの路線計画が効を奏して、法律事務所、化学工場、薬品会社など十四ヶ所の訪問を果たした。

欧州の最終目的地ロンドン。外遊は四十日を越えた。知らないメーカーを渡り歩いて、敏生は話のこつをつかんでいたが、その分、形式的な儀礼や挨拶にいささか倦んでもいた。

疲れた身体をホテルの一室に横たえ、なにげなくテレビのスイッチをつけた。流れてきたのはBB Cニュース。敏生はしばらく聞いていたが、突然起き上がった。「全部分かる!」。この発見に敏生は狂喜した。身体が軽くなって飛んでいきそうな感覚。一ヶ月の訓練はむだではなかった。今後の業務のことは分からないが、少なくとも度胸と語学力は付いた。これだけでも大した収穫だ。

別のチャンネルも回して、英語の上達ぶりを試しているうち、The Openの開催を告げるスポーツニュース。ゴルフファンの彼にはたまらないイベントだ。疲れが一瞬で吹き飛んだ。翌日は、ホテルにこもってテレビ三昧。

ゴルフの発祥地はイギリスだが、この頃は、PGA, Masters, US OpenそしてThe Openと、大きな試合はほとんどアメリカ人の天下だった。しかしこの年、一九六九年、トニー・ジャクリンが出て、イギリスはチャンピオンシップを奪回。長年の雪辱を果たしたのである。イギリス国内は喜びに沸き返ったが、その中に台湾の弁護士が一人、我を忘れて興奮していたことを知るものはいない。

二日間の命の洗濯を済ませて、敏生は活力を回復。すっきりした気分ホテルを出た。

国際発明特許センターの黄顧問から、イギリスに出願する特許をめぐって「Kings Patent Agent」を紹介されたことがある。名前から見て、よほど大きな事務所と思いきや、路地裏二階の間であった。エレベーターも老朽化している。きしきしと音をたてた。大いに失望させられた敏生だが、よくよく考えて見ると、こんなオンボロ事務所が、寸分違わぬ業務関係を長年にわたって続けて来られたというのも驚異だ。敏生は気を取り直して事務所の客となる。

大通りに取って返した敏生は、「名前でも人を判断するのはやめよう」と、自分に言い聞かせた。歩き回っているうちに、ロンドンには弁理士街というものがあることを知った。道の両側には、「本物の」大事務所が立ち並んでいる。いずれも百人を越える規模だ。

欧州歴訪は、予想以上の収穫を敏生にもたらした。敏生自身と台湾を大いに売り込むことができたし、連絡先の資料や現地の情報など盛りだくさん。大西洋の向こう側、アメリカに向かおうとする敏生は、晴れ晴れとした気分で行かばんを手した。

アメリカ訪問

欧州に別れを告げて敏生は、浅村氏の紹介状とありあまる自信、そして一山の荷物を携えて、アメリカ新大陸に降り立った。

ニクソン大統領就任約半年。世界の注目を浴びて月面着陸の一大イベントが秒読みに入っていた。興奮の渦の真っ只中に。アームストロングの「人類の第一歩」を、テレビで見ていた敏生自身も、新天地アメリカに、その第一歩を踏み入れたばかりだった。

ニューヨーク・ケネディ空港から、ミラー法律事務所共同経営者・蘇木先生の準備してくれた歓迎会に直行。蘇木先生は厚遇してくれた。彼の計らいでニューヨーク事務所にデスクを提供され、敏